報告一

天草灘とキリシタン ―海からの視点[1]―

鶴島博和

はじめに

本報告の目的は、今日のシンポジウムに結論的なひとつの筋道をつけることです。それは、私自身の考える「グローバル・ヒストリー」の視点から、一六世紀から一九世紀の海域九州、ここでは「天草灘」から見た、日本においてキリスト教が異端と化していったいわゆる「キリシタン」の歴史に切り込むことです。なお確認ですが、ここでいう異端とは、一六世紀以降の世界史的な意味で、カトリック世界において三位一体の教義を受け入れながら、ローマ典礼と教会組織を受容しない宗教集団をさしています。日本国内の異宗という意味ではありません。本報告では、キリシタンという場合、この異端化の側面、あるいは聖職者という執成しの専門集団の存在しない信仰を強調しています。

その際、空間的対象としては、一八〇五年（文化二年）の「天草くずれ」を経験した天草下島の西目筋、すなわち北から高浜、大江、今富、崎津と河内浦、そして羊角湾沿岸地域を中心とした天草灘地域を想定しています。天草灘とは、五島から甑島に引いた基準線の東側の内海を意味します。

一六世紀から一九世紀にかけて長期の時間帯を検証するために、天草灘地域の一町田組と大江組の大庄屋であった松浦家のプロソポグラフィカルな研究を時間軸の縦の結びの糸とします。

天草灘とキリシタン（鶴島）

「世界」が、暦や度量衡といった抽象的価値を共有する広域社会と定義することができるのであれば、「世界史」は、「価値」を時空間の中で切り取る作業と言えます。それに対して、私の言う、グローバル・ヒストリーとは、「モノ」そして広義の思想を含む「情報」を対象として「フロー・ネットワーク」を時空間の中で切り取る作業と定義できると思います。天草灘に展開した生業と信仰のネットワークを構築することが今日の最終的な着地点です。

一六世紀はヨーロッパが地球的な拡大を開始した時代、人口に膾炙した言葉で言えば、大航海時代に相当します。東アジア世界でその先陣を切ったのがポルトガル人交易者とイエズス会士でした。ただポルトガル人が、ヨーロッパから航路を新しく開拓したわけではなく、既存の交易ネットワークを利用して極東にまで来たことは強調しておきたいと思います。彼らは、東アジアの世界では、いわゆる「倭寇」よって作り上げられた交易ネットワークに乗って活動しました。倭寇というと、海賊というイメージが強いのですが、武装海民集団と定義しておきます。

鉄砲は一六〇六年（慶長一一年）に島津藩の南浦文之によって編纂された『鉄炮記』で、一五四三年にポルトガル人が種子島に伝えたと言われてきました。しかし、その頃日本に向かう中国船が朝鮮半島に漂着した際、大量の鉄砲を運んでいたことが確認されています。そもそも種子島に伝わった鉄砲はポルトガル様式ではなく東南アジア様式であったという説もあります（宇田川武久『鉄炮伝来』）。海域九州で、鉄砲は、この頃、雨だれのように浸透してきたのでしょう。

一六世紀前半までに、日本には鉄砲が伝えられたのでしょうが、その担い手は倭寇だと思います。そもそも種子島に漂着した船は、海域アジアの倭寇の頭目の一人で、海域九州では平戸に居を構えた王直のジャンク船でした。ポルトガル人という稀有な存在が、史料上で、彼らが伝えたというフィクションを生んだとしても不思議はありません。倭寇は、武装集団である以上鉄砲で武装していたのでしょう。彼らが交易で扱った品物には綿や絹以外に火薬の原料である硫黄と硝石があります。彼らが鉄砲と関係がないはずはないでしょう。

ヨーロッパ思想の根幹をなしたキリスト教も東アジア世界における倭寇のネットワークを利用して日本に入ってきました。フランシスコ・ザビエルが、マカオで倭寇崩れの薩摩人で確認できる限り日本人最初のキリスト教徒となるアンジロウ出会ったことが日本布教の契機になりました。

アンジロウの導きで、ザビエルは、一五四七年に中国のシャンク船に乗って鹿児島にやってくるわけです。ザビエルはその後、倭寇の結集点であった平戸にやってきました。イエズス会の活動は、一五六〇年までは平戸を基点として、次いで最終的には長崎と天草灘地域を拠点としてそこから東へ、都へと布教あるいは防衛的に後退していく形をとりました。従って、「天草灘」地域は、例えば一五八七年（天正一五年）の秀吉の「バテレン追放令（これは最終的には空振りに終わりますが）」等、「都」（権力者）の対応に対する避難場所としての最後の頼みの綱でした。そしてその地域にキリシタンが残るわけです。

1．天草への布教

（1）籠手田氏

平戸は、平田松浦党の拠点の一つでした。松浦党は、浦に拠る、漁師、運搬人、海賊、戦士であった武装的「海民」集団、「倭寇」の連合体で、平戸松浦氏は、彼らを取りまとめた「海の領主」だったのです。しかし、キリスト教が伝来した時の平戸の支配者、松浦隆信は、キリスト教受容に慎重でした。「モノ」と違い「思想」（つまり生き方と死に方）の受容は容易ではなく、反対派の意向を汲まなければならなかったからです。この中で、キリスト教の受容に積極的だったのは、生月島の南部と平戸島の西海岸そして度島（たくしま）を支配していた籠手田安経（やすつね）でした。安経は、「石火矢」の技術習得を熱望するほど（「三光譜録」四〇）、鉄砲によって高度な武装を推し進めた海民の「海の領主」でした。その安経は、一五五八年に、度島、生月、獅子、飯良、春日の「領民の一斉改宗」を行いました（フロイス「日本史」一、一八）。最も早いキリスト教支配者で「領民の一斉改宗」の実施者でしょう。一五六四年には生月の北部の領主で、安経の兄弟一部勘解由（かげゆ）も領民の一斉改宗を行いました（「生月人文発達史」）。度島、生月、平戸西海岸の海民はキリスト教徒となったのです。

一方で、一五五九年頃から、平戸の政治環境に変化がみられます。一五五九年には王直が処刑され、平戸における中国倭寇の影響力は消滅したでしょう。同時に松浦隆信は、キリスト教から距離を置き始めます。それでも、隆信と安経との良好な関係は維持されました。それは、隆信が籠手田の軍事力と海軍力に大きく依存していたからです。一五六六年隆信は飯盛城の相神浦（あいこうのうら）氏を攻略して、佐世保地域を領有し松浦党での支配的地位を最終的に確立します。また五島での争いに二〇〇隻の船団を派遣しますが、それを率いたのは籠手田安経でした。一五六六年までには

松浦隆信は「海の領主」から、領国経営に重点を置く戦国大名への道を歩み始めていたのです。そして、皮肉なことにその先兵となったのが、松浦党の海民連合体という古い体質を維持したキリスト教徒の「海の領主」籠手田安経だったのです。しかし、そこにあった亀裂は修復不可能なものでした。

（2）天草への鉄砲隊と松浦氏の伝承

一五六〇年（永禄三年）、上津浦（こうつうら）氏と栖本氏の抗争で、上津浦に組した有馬純忠の依頼を受けて平戸の松浦隆信は二〇人の鉄砲衆を派遣した、と言われています。史料的に確認できる九州での最初の鉄砲使例です（『松浦家世伝』『大曲記』『八代日記』）。しかし、当時の松浦党の軍事能力を考えると、彼らは籠手田配下にあったキリスト教徒の武装海民集団ではないでしょうか。そしてこの鉄砲衆の平戸帰還後の確認はとれません。一五六〇年というと、平戸での信仰を巡って緊張が高まった時期です。彼らは新天地を目指したのかもしれません。江戸期に、天草下島の一町田組と大江組の大庄屋を務めた大江松浦氏の伝承は、「松浦は籠手田の係累で、二〇人の鉄砲衆の頭を始祖とする。当初軍ヶ浦に来て、それから河内浦、そして最後に大江に住んだ」というのです。実際、大江松浦氏は平戸起源と思われる八月一五日のシビレ祭を大江キリシタンの水方であった山下家と守っていました。また、平戸筒の中筒の鉄砲を所持しています。しかし、これはあくまでも、状況証拠にすぎません。この伝承を史料的に確認するのは容易ではありませんし、必ずしも成功するとは限りません。しかし、それでも、こうした口頭伝承の不協和音を取り除いて、確かな旋律を紡ぎだすことが必要でしょう。そのためには少し遠回りをして、天草へのキリスト教布教を検討しなくてはなりません。

（3）河内浦への布教

一五六九年二月二三日、アルメイダは天草氏の居城河内浦に到着して布教の橋頭保となる崎津という港と教会相当施設を確保しました（「ルイス・デ・アルメイダの書簡」）。しかし、このときアルメイダを招聘したのは、領主天草鎮尚ではなく、イエズス会側がこの地の指導者（regedor）とよぶドン・リアンでした。<regedor>は、これまで執政官とか家老と訳されてきました。しかし、行政組織がない時代と場所に執政官は時代錯誤ですし、どうも天草氏の客人あつかいであって家中のものではないようです。ここはラテン語であれポルトガル語であれ、一度原典に立ち返って解釈する必要があるでしょう。その意味で、今日列席され

た東大史料編纂所の岡美穂子氏の仕事に期待したいところです。布教の前に河内浦にはキリスト教徒あるいは洗礼を受けてはいないが、神の祝福を望むキリスト教徒シンパがいたと私は想定したのです。「指導者」とは、何らかの理由で布教先にいて、その地のキリスト教化に協力した俗人と仮定しています。宣教師はまったく伝手のない状態ではなく、現地の協力者の導きによって布教を行ったと考えるべきでしょう（「ルイス・デ・アルメイダの書簡」一五六九年）（「フランシスコ・カブラルの書簡」一五七一年九月二二日）。

アルメイダは鎮尚の館の側にある寺に（現崇円寺）に宿泊しましたが、領主天草鎮尚に対面するまで最短でも二〇日あるいは二ヶ月程かかっています。やっとの対面の場で、アルメイダは教会の建設、志岐までの西目筋の海岸線、河内浦、崎津、今富、大江、高浜、小田床そして都呂々までの七レグア（二八～三五キロメートル）をその布教の範囲（鎮尚の本領）とすることを始めとした五つの要求を出し、認められました。アルメイダが鎮尚と会うまで、これほど時間がかかったのは、布教を進めたいドン・リアンと、反対する鎮尚の二人の兄弟（大和守、刑部大輔）や彼の妻そして僧侶との間に衝突が発生していたためでした。そのため、鎮尚は一歩を踏み出せなかったのです。アルメイダが観察したように、鎮尚の権力は、小さな城に跋扈する土豪連合の力に依存していたと言えます。鎮尚が布教を認めたのは、彼の直接的な本領だけということになりますが、そのことが当時の天草氏の権力の地域的な範囲を明らかにしてくれます。そして、この本領こそ、キリシタンが生き延びていった地でした。

ドン・リアンが布教に尽力した、一町田の本村の郊外は、反対派の拠点が南の下田城や旧信福寺あたりにあったことから、本村の北に位置していたと思われます。私は、高浜へ行く往還と、平床、市ノ瀬方面の往還の三叉路にある平野の地を想定しています。松浦家が一町田から大江に移る前に平野を名乗ったことと関連させて考えています。

（4）河内浦騒動

布教が進み始めると、反対派は、七〇〇名の武装兵を率いて某寺院（旧信福寺：大和守は当時の信福寺の傍の下田城の鎮守）に集まりました。この間、鎮尚はリアン寄りの調停者に徹しています。これに対して、リアンの対応は素早く、さらにリアンのために死ぬ覚悟ができているという大勢のキリスト教徒がリアンの居館に集まりました。彼らは昨日今日のにわかキリスト教徒というより、リアンの庇護下にあって、キリスト教的教えに慣れ親しんでいたとさ

え思えてきます。ここで行われたのは、籠手田領と同じくリアンの領地の一斉改宗だったのです。

ドン・リアンの屋敷には武装した六〇〇人のキリスト教徒がいて、鉄砲用の銃眼を備えた防御柵を備えていました。それも、船の銃眼を想像させる構えです。天草氏の配下にある人物が、主君を超えた鉄砲隊を組織していたのです。このことが、私が、リアンは一五六〇年に天草に派遣された鉄砲衆の頭で、経緯は不明ですが、河内浦の有力者の娘と結婚してこの地に落ちついた人物とする根拠です。結局、鎮尚が仲裁に入り、ドン・リアンと世帯五〇名は、「自身が所有していた大船に乗り」、一時、口之津へ避難しました。リアンは大型船を所有した武装海民だったのです。

リアンが退去した後、騒ぎは終息したかに見えました。しかし、リアンという鉄砲隊を組織した軍事的後ろ盾を失った鎮尚は、盟主大友義鎮（宗麟）を頼り、彼に布教を認めてもらう書状を出してもらいそれを家臣に見せて自己を正当化したのです。この行為は火に油を注ぐことになりました。これに対して、反対派の大和守や刑部大輔たちは、島津氏や相良氏と連絡を取りあい対抗していきます。河内浦の宗教対立は、背後に九州の戦国大名の抗争を控えた「河内浦合戦」の様相を呈してきたのです。騒ぎのなか、鎮尚は本渡城に避難しましたが、大友宗麟やおそらくは口之津から移動してきたリアンたちを含む現地の指導者たちの援助もあり、一五七一年までに河内浦城を奪取し、長子久種とともに受洗し、天草氏本領のキリスト教化の方向が定まりました。

その際、河内浦にいた一向宗指導者の改宗も「一斉改宗」に拍車をかけたと思われます。彼は、キリスト教に改宗する際に、庵と土地をイエズス会に寄進したでしょう。後に、布教の拠点となった日本人聖職者養成機関コレジオはこの庵とその土地そして天草久種が寄進した土地を基本財産としたようです。民衆救済宗派の一向宗とのシンクレティズムはキリシタン研究ではその始まりから視野にいれておく必要があります。イエズス会は親鸞をルターと相似する存在と考えた節がありますし、論争を挑む仏僧はすくなくとも、同じ「宗教世界」の土台でキリスト教を見ていたわけです。その後の徳川幕府による仏教の統治制度内化にはキリスト教の影響を見て取ることもできると考えています。仏教とキリスト教が接触したとき、当然の反目と対立、それと重なる形で宗教的親和世界も生まれたことも考えてみたいと思います。そうでなければ、容易に改宗が進むとも思えないのです。とくにキリスト教が、医療や福祉によって、そのレベルがどうあれ、当時の在の人々を「民」として組織的に救済対象としたことは大きいと思います。たし

かに一向宗はライバルだったのでしょう。天草の土豪連合は時代の戦国大名化の波に巻き込まれていきます。領民のキリスト教徒化による均質化はそれに拍車をかけたでしょう。しかし、在地から曲がりなりにも（小）大名化したのは天草氏だけで、残りは小西に巻き込まれていきます。その差はコーロス徴収文書に現れた、下島と上島のキリスト教組織の差として考えられると思いますが、これ以上はお話しできません。では、リアンはどうなったのでしょうか。

（5）天運理安信士

松浦家の系図は初代から四代までは不明な点が多いと言えます。松浦家四代とされる松浦半之丞の戒名は、「元天運理安信士　霊位」でリアンの名を組み込んでいます。洗礼名であるリアンは一六世紀末期のキリスト教徒や初期のキリシタンでは一般的でした。松浦半之丞が、河内浦のキリスト教化に尽力した、倭寇に繋がる籠手田配下のキリスト教徒の戦闘的海民集団の頭の記憶を維持していたと推定することは興味深いと思います。確定できはないのですが、平戸地域から鉄砲隊の頭として、倭寇の基地軍ヶ浦に来た、そして軍ヶ浦で造船業をいとなんでいる浜田家とは代々一揆的結合にあったという大江松浦家の口伝も検証に値するでしょう。

2．天草灘の祈りのプロセッション

（1）大江組大庄屋松浦家

一七四七年（延享四年）七月に、年貢払いの不備で大江組大庄屋赤崎伝左衛門は職を解かれました。大江の百姓たちは、一町田村の平野（松浦）四郎兵衛を推薦し、これを大江組の庄屋衆が追認して、結果を富岡の代官所に伝え、受理されました。この大江村内部で四郎兵衛就任に積極的に動いたのが、大江村四九人の頭百姓集団だったのです。彼らは、水方であったり、祈りのチャペルの塚をもつ大江組コンフラリアの指導的家族でした。大江組は、キリシタン百姓の寡頭制支配の自立性の強い村だったのです。この四九人という家族は、大庄屋交代劇のなかで定まっていったようですが、機会を改めてお話したいと思います。

解任された赤崎伝左衛門は、一六一七年（元和三年）に当時の管区長マティウス・デ・コーロスの報告書、所謂「コーロス徴集文書」に記録された大江村の指導的キリスト教徒であった赤崎孫右衛門の子孫でしょう。赤崎家はキリシタンでしたし、後任の一町田の平野（松浦）四郎兵衛も、シビレ様崇敬や理安の戒名からキリシタンと考えられるでしょう。彼は平野を根拠地としたリアンの後継とも考えてみたいのです。赤崎解任の理由は、年貢の問題よりも彼が

キリシタンであったことによるのかもしれません。そうだとすれば、大江村の四九人の頭百姓たちもしたたかで、代わりに一町田村のキリシタン平野（松浦）を招聘したことになります。もっとも松浦家の宗教履歴をみるとキリスト教、一向宗、浄土宗、曹洞宗、神道とまさに混淆状態です。さらに、木村報告は、竹屋善左衛門や蔵元倅友兵衛も大庄屋候補者として、大江組の経営難の側面を重視しています。

（2）天草灘のキリシタンネットワーク

五島奈留島に残る「今日の御じき」といわれる祈祷文は、奈留島松山集落の松山家が伝えたもので、書体から、おおよそ一八世紀中頃から一九世紀初頭までのものとされています。祈祷文の最後の第六番目に、祈りの証人（あかしびと）の名が挙げられていて、連祷の執成しとなっています。もうひとつ、同じ祈祷文が、福江島の玉之浦に残っています。これは「今日の御慈悲」（misericordia）という題になっています。今日は検討しませんが、奈留島の「御じき」も聖体拝領での祈祷文と考えられるのではないでしょうか。

祈祷文は、五島に残るものであるにも関わらず、その主要な部分は、天草大江組のキリシタンを記念したものとなっています。祈祷文は、①「千人塚」という島原・天草一揆の本島における殉教の地から始まり、大江に下り、指導者であった②平の塚に眠る善者、③赤崎六良兵衛と④妻のひつなに祈りがささげられました。この赤崎六良兵衛は大庄屋役を解任された赤崎伝左衛門の祖父あるいは父と思われます。祈祷文は、⑤ふる寺の御役人様に続きます。彼らは、水方で、地元でいまでも「古寺様」とよばれる教会跡地の守り人だったと推定されるのではないでしょうか。その裏山には聖水の取水場とされた「妖蛇畑」があり、水方が守っていました。次いで祈祷文が語る崎津の「中町の二人の兄弟」は、コーラス徴集文書に記載された二人の松永の子孫を思い起こさせます。そして、祈祷文は、今富に向かい、往還沿いの宇土迫（⑨と⑩）、ついで漂着や交易等で崎津に定住した中国人のキリシタンの墓（⑪）を記念しています。彼らは、抜け荷の交易者でしょうか。崎津と羊角湾は、海域九州交易の一つの終着点でした。天草灘のキリシタンは、海民であり、交易ネットワークの中にいたのです。

祈祷文は、その次に今富の塚（⑫）、おそらくは文化二年のくずれで探索方によって破壊された「弓取の墓」を記念します。ここは、今富集落の祈りの中心地でした。プロセッションは、今富から崎津湾の東岸の「向い」に至り、最終的には富岡と同じく島原・天草一揆の激戦地でキリシタンが戦死した場所（島子⑮）を記念して、オラショの天

草分は終わります。祈祷文の証人の核となる大江―崎津―今富の分は、それ自体が二部構成になっていて、最初と最後の①と⑮は導入と終末で島原天草の一揆の記憶への祈りからなっていたようです。②から⑭までは、大江、崎津・今富のキリシタンの記憶です。言い換えると、祈祷文を唱えた人々の原風景でしょう。

記念の場所は、現地記憶とともに一般的な聖人への祈りがカンマ区切りとなり、⑮の島子のあとに、日本のキリスト教化にとっての原点ザビエル（列聖は一六二二年三月一二日）への祈りが句点となって次の第二部に移ります。次の第二部では、記念の場は、神浦・池島と肥前外海に移り、そこで完結したのでしょう。祈祷文は最終的にはそれが作成されたころに五島奈留島の松山へ移住したキリシタンによって唱えられたのです。

この祈祷文を伝えた奈留島松山集落の松山家は、大江集落の指導的キリシタン一族と繋がる可能性があるでしょう。現在の大江天主堂の敷地は、赤崎家と松山家のものであったといいます。一七四七年の大庄屋更迭で赤崎家とその関係者である松山家の一部は、高浜や崎津、そして外海へ移動し、外海の神浦と池島で「初穂の祈り」を唱え始めた、とは言えないでしょうか。もっともこの問題はデリケートな側面があることも考慮しなくてはなりません。

聖霊降臨を祈り、そして福音を受け入れ耐え忍ぶ者は初穂なのでしょう。「子羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らはささげられた初穂として、人間の中からあがなわれた者である」とは「ヨハネの黙示録」（一四―四）です。

連祷の証人（あかしびと）は、神への執成しのみならず、祈るものたちの帰属意識を表しています。大江・崎津・今富→神浦・池島→五島奈留島の松山という祈りの道は、西海のキリシタンたちが築き上げた海の信仰ネットワークを示していたのです。[2] こうした海域ネットワークによって信仰は維持されたのです。天草灘から五島灘にかけてのキリシタンは海民の信仰でもあったのです。大江や崎津の漁民のキリシタンたちは、五島や甑島を庭としていました。五島のキビナゴ漁は崎津から伝わったと言われます。後述しますが、甑島では大江の漁民たちが鮪漁や鰹漁を行っていました。五島から甑島の間の天草灘は、まさにキリシタン海民の共存圏だったのです。

3．天草くずれと海域天草の生業そして産業化

（1）天草くずれ

一八〇五年（文化二年）島原藩は、高浜村庄屋上田宣珍を現地のフィクサーとし、その兄弟（養子）で今富村庄屋

の上田友三郎の事前調査と報告書をもとに、大江、崎津、今富の三か村と後に高浜村を追加しての「心得違いの者」の吟味を開始しました。一応幕府の指示に従ってのことです。しかし、この吟味にはいくつかの疑問があります。一つは、この地域に「キリシタン」が存在していることは、幕府も承知のことでした。また島原藩も、日程や準備の関係から、羊角湾沿岸域にも「心得違いの者」が存在していることを知っていながら、吟味の対象から外しました。要は、事前に準備されたシナリオにそって吟味はなされたのです。それでも、この吟味によって、我々は天草西目筋のキリシタンの実態を朧気ながら理解することでができるのです。くずれは、「発見」ではなく、「整理」だといっていいでしょう。吟味を開始する前から、島原藩は「心得違いの者」という柔らかい言葉を発案して「キリシタン」の数を五〇〇〇人、幕府は六〇〇〇人としました。最終的な所謂「発見」された「心得違いの者」は五二〇五人ですから、最初から話はついていたかのようです。そして、一番の疑問は、幕府側に吟味への熱意が感じられないことでした。実は、幕府は、天草の吟味どころではなかったのです。

一八〇四年（文化元年）八月三日、ニコライ・ペトロヴィッチ・レザーノフが、ロシア皇帝アレキサンデル一世の親書と先年ラクスマンが持ち帰った信牌を携えて、ヨーロッパ的常識からは「正式な国王使節」として長崎に来航しました。しかし、一行は出島近くに留め置かれ、幕府からの返答は遅く、ようやく一八〇五年（文化二年）三月九日になって目付役遠山景晋（かげくに）から、「中国・朝鮮・琉球・オランダ以外の国と通信・通商の関係を持たないのが祖法」としてロシア側の要求は拒絶されたのでした。吟味が始まるのは三月一一日ですから、幕府にとっては「天草くずれ」どころではなかったのです。吟味開始後、島原藩は長崎奉行に吟味の様子を報告しましたが、長崎奉行側からの連絡はなく、暫く経ってから「おろしや（ロシア）人の呼出しで混雑していて、連絡も不行届きになり、失礼しました」という旨の連絡が入ったくらいなのです。

ヨーロッパ的外交の視点からすれば、幕府の対応は非礼です。しかも幕府側が祖法を持ち出したことは、権力の最高意志（主権）が法に従って国交を結ばないということです。これでは、主権国家と法治の概念が生まれつつあったヨーロッパ諸国に外交としての「鎖国」を宣言したことになります。一八〇七年（文化四年）のロシアの戦艦による樺太の松前藩番所の攻撃はこの文脈で考える必要があります。これに対して幕府は同年一二月に「ロシア船打払令」を発布して警備体制を構築しました。ここに世界史における「鎖国」日本が誕生したのです。

一八〇五年（文化二年）一二月四日、「天草くずれ」の吟味が終了した後、上田宜珍の跡取り作七は島原藩から大江組大庄屋見習いと高浜村庄屋見習いを任じられました。大江組大庄屋松浦四郎八を差し置いてのことです。上田家が大庄屋職を継ぐというのが、天草くずれでの宜珍の直接の狙いだったのでしょう。それは、通行手形の発給による国内交易と交通の自由の獲得にあったからと推察しています。しかし、宣珍の狙いは、結局、彼一代限りの名誉大庄屋職で終わり、松浦四郎八とその子穀助と繋がる大庄屋家松浦が潰されることはありませんでした。それは、「塚本政直高浜絵図」の銘文にあるように「鎖国」時代を迎えて、大江を本拠地とする松浦家の海民統制力と軍事力を、海防上島原藩や幕府は必要としていたからでしょう。鎖国によって世界性を切り捨てられることで、天草のキリシタンは生き延びたというのは言いすぎでしょうか。

文化二年の吟味は、大江、崎津、今富、高浜といった大江組の中心村落を対象としていました。しかし、大江組大庄屋松浦四郎八、今富村庄屋上田友三郎、崎津村吉田宇治之介の三名は吟味からはずれています。利害関係者は外すということでしょうか。しかし、上田宣珍は、自分の村である高浜村の吟味に積極的に参加（もみ消しにも見えます）していますし、今富村でも上田友三郎が、消極的に関わっています。結局外されたのは、松浦四郎八と吉田宇治之介の二名でした。吉田については、唐船曳航援助銀を隠匿したことで村の漁師との対立があったことを理由としています。一方、松浦四郎八はキリシタンとして認識されていたようです。島原藩士で富岡代官所勘定奉行として吟味の現場監督であった川鍋次郎左衛門は、三月一六日の書状で、大江村の心得違いの者であった儀平という酒屋が大庄屋の親類であると記しています（『天草吟味扣』）。この儀平は『大江組転切支丹並類族死失帳』[3]に記録された、今富村の三助系の類族、さんとその婿大江村酒屋源右衛門の子麹屋儀右衛門の息子と思われます。キリシタン儀平の親族は、甑島に渡り、鮪漁を営み、息子の一人は大江で松浦家の地所内で暮らしていました。大庄屋がキリシタンであることがわかれば、もっともこの頃には権力側はキリシタンという言葉を使わなくなりますが、島原藩は責任を逃れることはできません。したがって、これはトップシークレットだったのでしょう。

（2）海域天草の生業

崎津村―大江村の水主（かこ）浦としての網代は、西は天草灘の一二、一三里（五〇キロメートル程）の外は海面を設定しないとあります。甑島は網代の範囲内とされていました。

また安政元年のことですが、甑島には天草の資金が投入されています。四郎八を継いだ松浦穀助は、甑島での鮪漁と鰹漁を統轄しかつ資金を提供していました。網元たちは、松浦に負債を負うことで経済的にもその支配下にはいったのです。大江での鮪漁は、古くは文化年間から知られています。それは皮肉にも『上田宣珍日記』で、宣珍が、大江の枝郷、かつてリアンも船を係留したであろう、倭寇の基地であった軍ヶ浦の鮪漁に興味を寄せているくだりに見ることができます。従って、天草灘の大江近海でも鮪漁は行われていたと言えます。そしてそこには多くのキリシタンが関わっていたのです。

一七七三年（安永二年）、天草灘に面する牛深茂串で、「邪宗の者」の存在が発覚しましが、彼らの中に「転切支丹並類族死失帳」に記載された大江の漁師であった新四郎系の子孫が含まれていたのではないでしょうか。茂串では、一八二九年（文政一二年）に茂串鮪浦が開拓され、一八六七年（慶應三年）には、茂串の一〇人の漁師が、冬場四か月の漁期に一人一両半を出しあって、鮪網の権利を借り出していました（「岡郷永代万覚帳（畑中家）」）。金銭を支払っての借り出しということは、収益があるわけで、鮪の市場がすでに西目筋で形成されていたことを示しています。茂串の鮪漁は大江村の鮪漁との関係が深かったはずです。中園報告を考慮すると、海辺のキリシタンの生業は、天草灘から五島灘そして平戸・生月島までの一帯での信仰ネットワークの中で行われ同時にそれを強固なものとしていったと言ってよいでしょう。

児島報告や木村報告が示した一六八三年の鄭氏政権の瓦解以降の清の海禁停止による交易の活性化は、一七一五年の「正徳新令」による貿易統制を招き、余剰フローの受容体として、鱶鰭や鮑などの俵物の現地調達が可能であった牛深―大江海域のキリシタン海民の役割も考慮できるかもしれません。

（3）産業化

松浦家は、甑島―羊角湾での「抜け荷」に関わり、昆布交易とも関わった天草の豪商石本家を通して販路を得ていた可能性がありますが、現時点では、家の伝承に留まり、史料的裏付けはできておらず、可能性としてとどめておきます。品物の運搬路や販路についての松浦の口伝では、宇土半島の郡浦まで行き、豊後街道を経由して鶴崎で加来何某が差配し、大阪へ運んだというのですが、『熊本藩侍帳集成』などでも加來家は確認できますが鶴崎との関係は現時点ではわかりません。コースについての一つの仮説を提示してみます。不知火海を郡浦まで行き、その郡浦から有

明海で川尻に入り、緑川水系の緑川―木山川を使って舟で益城木山に出て、そこから陸路を経由して大津で豊後街道に入るというのはより安全で実利的ではないしょうか。児島報告にあるように、海路からの抜け荷を防ぐための下関番所の設置を考えると、陸路を使ったのというのは可能性が大きいでしょう。いずれにせよ、単なる仮説にすぎませんから、これらからの検証が必要です。

一方、上田宣珍は、陶石と磁器の販売と、醸造と製薬、鰯と鮪による商業的漁業をより広範に進めようとしていました。とくにその活動は、宣珍の日記を見る限り、文化二年の天草くずれのただ中から活発になります。陶器や陶石の積出湊としては、高浜は不安定で、彼は軍ヶ浦を利用していました。同時に、宜珍は高浜の漁村化つまり定浦化を進めていました。松浦家が天草灘の南、甑島方面を視界にいれていたのに対して、上田は、北の長崎とその先の五島を見据えていたのです。宜珍は、吟味で騒がしかった一八〇五年（文化二年）に磁器の研究を進め、高浜に店を開く一方で、富岡での八田網を研究し、亀川から水主五人を引き受け高浜の定浦化をめざしていました。宜珍は、九州横断の陸離を利用した松浦と異なり、廻船用の船を三隻所有し、九州西回りコースを利用していたのです。

また、彼は高浜の産業インフラの整備と振興をすすめています。一八〇七年（文化四年）六月一八日に、村の寄合で、波止場建設のための普請を指示して、夫役を割り振っています。百姓方の方からは、防波堤は受益者である漁方と船方でおこなうべき、という異議がだされました。これに対する、宜珍の説得の論理が興味深いのです。彼は、こういいます。「防波堤の普請をしてきたのは、河口が塞がるからだけではなく、洪水のとき水はけがよくなり土手の崩壊もなくなり田畑のためになる。（百姓方にも利益があるのだから）河口が改善されれば他の地域の船や八田網の鰯船団も来港するので村全体の利益にもなる」と。そして「これまで漁方や船方も井出普請（用水の堰き止め）をしてきのだから、百姓方も波止場普請を行うべきである。これからは漁師の子孫も百姓になり、百姓も漁師になる可能性もあるのだから、村全体で応分に負担して欲しい」（横線は筆者）と、村のインフラ整備だから、村人として協働して事にあたって欲しい、と説得したのです。ここにあるのは、天草の他の地域にみられない百姓と漁師間の通婚を前提とした村民の形成です。宜珍は、村民を「労働者」としていました。その意味で彼は先駆的「商業的ブルジョワジー」であった、と言えるかもしれません。

天草くずれは、先駆的な内国商業資本家上田宣珍と統制交易外にいたフリーランサー松浦家との争いという側面を

もっていたのです。しかしそれは、中国を核とした海域東アジア、あるいはその東端の天草灘という磁場での話でした。しかし、この中国を中心とした東アジア経済交易圏に巻き込まれた海域天草が、日本における近代の産業化に貢献することはなかったのです。時代は西欧と太平洋を向いていくことになります。

おわりに

まことに一八〇五年（文化二年）の天草くずれは、地元にとっては未曽有の「大津波」だったのかもしれません。同年夏に行われた補充調査である大江村の「白札付書上帳」は、聞き取りを行ったのが松浦四郎八や地元の有力者だったせいもあり、心得違いの者たちの本音が透けて見えます。曰く、「心違いなのはみんな知っている」、「心得違いでないものも心得違いのものの家に住み、同じように暮らし牛肉も食べている」。そして「それならば心得違いでいい」とまで言っているのです。村共同体内では周知のことが、島原藩と上田親子によって表に引き出されたのです。そして、幕府にとっては、「さざ波」でした。一八五六年（安政三年）の「浦上三番くずれ」のさい、長崎奉行は天草くずれのことを西国郡代に問い合わせています。奉行所が知らないのも驚きですが、郡代池田岩之丞の回答には言葉を失います。回答は、「天草の一件の起こりは、大江村の幸左衛門（達六人）が家々で引き継いできた異宗を信仰したことにある。そして大江村の嘉助ほか三〇人が同様の（怪しき）信仰をした」というものです。名子とその本百姓の関係にあった上組の暦を扱った帳方であった名子幸左衛門と代表的なキリシタン本百姓嘉助は、トリックスターにしたてあげられたのです。天草くずれが、「弾圧に耐え信仰を守った」という大きなストーリを獲得するのは近代に入ってからなのでしょう。それも、「大学」という近代の知的専門機関の目を通してそうなのです。

海老沢有道は、「キリシタンの伝来によって日本は真の意味での［ママ］始めて世界史の舞台に登場した」といいます。キリスト教の歴史が、個別史学としての「単なる教会史」に終わらないためには、「国内的情勢の高度の史的研究と、内・外史料の吟味と世界史的視圏に立」つ、構造史的視野を獲得する必要があるのです。[4]

キリシタンは、天草灘から平戸までの海域世界で、「沈黙の宗教」として生き抜いたのです。それも、世界史におけるキリスト教の異端、幕府（権力）側の視線では、仏教的視野からの「邪宗」として、「キリシタン」として、そうなのです。

註

(1) 本論の詳細な内容については、鶴島博和「もう一つの天草くずれ：天草キリスト教史序説―信仰と生業―」『比較日本学研究部門研究年報』第一八号（二〇二二年）、八六―一二六で検討したので、史料や註そして図などはそちらを参照していただきたい。

(2) 文化二年（一八〇五年）の「天草くずれ」で、高浜村の七兵衛は、五嶋で大江の善助からキリシタンに教導されたが洗礼名はないと告白している。五島や天草灘はキリシタンの信仰活動の場であった。「宗門心得違惣人別異名覚帳」（上田家文書）この史料は、「今日の」報告者児島康子氏に御教示いただいた。記して感謝する。

(3) 鶴島博和編『一町田組・大江組大庄屋松浦家資料集（一）』（刀水書房、二〇二一年）、九八―一九一。

(4) 紙幅の関係で中山圭氏がコメントされた聖具に言及する余裕はなかった。

（熊本大学名誉教授）